
IS -

こーりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS -

【コード】

N9866Y

【作者名】

こーりん

【あらすじ】

ただの高校生で、ただの人だった少年の、夢の中の話、でも夢の中だけの話では収まらなかった。

蝶

俺は見ていた、いつも見る夢だ。

それは俺が『蝶』になる夢。

そして見る夢と言えば、『戦争』だ。

人が、『主に』女性がパワードスーツの様なものを付けて戦っている。

何故『主に』と言ったかと言うと、一人だけいたんだ、いつも一人女性達の中で一緒になって戦っている『一人の少年』が。

「大丈夫か！？ 篤！！」

「私の心配より自分の心配をしろ！」

『白い少年』と『紅い少女』はいつも戦いの中で互いを心配し、いつも喧嘩をしていた。

俺はと言うと呆れて何も言えない、そもそも夢の中での俺は蝶なので何も言えないが。

ただ、そこで見る夢は『嫌にリアル』だった・・・。

もしかしたらコレは

俺が蝶になった夢を見てるんじゃない

蝶が『俺』になった夢から覚めた時に見ているものなのかもしれない

でも、いつも通り目を覚ますと、俺は、『人』だった。

蝶（後書き）

なんか適当に行くっス、長ったらしくgggggg行くか、パパッと行くかはそこんどこも適当で。

夢(前書き)

夢ささす

夢

夢から覚めたは良いが折角の休みだと言うのに・・・はあ。

【6月12日土曜日 時刻5：57 晴れ】

「まったく、あの夢にも困ったもんだな・・・」

あの夢を見ると何故か不安な気持ちになる、なんていうか、胸の中をぐるぐる何かが渦巻いてるような感覚だ、慣れていたつもりなんだけど、こうしてまたあの夢を見てみるとやっぱり駄目だな。

「おい！慎！起きてるかー！！」

一階から声がする、ふと時計を見ると、

「マジかよ・・・」

【6月12日 時刻7：41 晴れ】

要するに俺は1時間以上ベットの所でボーっとしていたわけだ、まったく自分に呆れるよ。

「なんだ起きてたのか」

「久々にさ・・・」

「また、あの夢か？」

「ああ……」

「そうか」

「それで？」

「ん？」

「なんか用事があったんじゃないかねえの？」

「ああ、そうだった、健悟、来てるぞ」

俺は私服に着替えて一階のリビングに入ろうとしたら声が聞こえた。

「いや〜、本当いつ見ても美代子さんて綺麗ですよねえ〜！」

「お前毎回会ったたびにそれ言うよなあー」

「だって本当の事じゃないですか！」

「まあ、たしかにな！それに悪い気分じゃあないしな」

またか………。

あいつの名前は、はながた花形 けんじ健悟、俺が生まれたときからの腐れ縁野朗
2号だ。

あいつは俺に家に来るといつも俺の姉、さくらだ櫻田 みよこ美代子、にちよっか
いを出す。

まあでも、姉ちゃんも姉御肌ってやつだからだろうか、結構いるんな人から慕われてたりするそうだし、それに姉ちゃんは弟の俺が言うのもなんだけど、スゲー美人だったりする、そのせいで俺は学校のヤツらに写真撮って来いだの、羨ましいだのメンドくさいったらありやしない……はあ。

ガチャッ

「またか、この野郎」

「悪いか、この野郎」

「で、んだよ？」

「あいつも誘ってどっか行こうぜ！」

「いいけど、どこ行くの？」

「決めてねえ！！」

「またかよ……」

これもいつものパターンだ、健悟が俺に家に来て「どっか行くぞ！」と言うけどいつも行き先は決まっていらない、行き当たりバッタリってヤツだな。

そして健悟が言った『あいつ』ってのは草野^{くさの} アリシア、俺が生まれたときからの腐れ縁野郎1号だ、野郎って言っても女の子だけだな、あと名前から見てもわかるようにハーフだ。

「美代子さんも一緒にどうですか?!」

「私は忙しいからパスだ」

「どうせゴロゴロしてるだけだろ」

「ゴロゴロするのに忙しい」

「だってよ」

「ですよー」

「さて、行くか」

【6月12日土曜日 時刻9:38 晴れ】

ピンポン

「アリシアー! 野球しようぜー! お前ボールなー!」

「そんなこと言ってるまた」

「誰がボールだクソ健悟おおおお!!!!」

「グハアアアアアアアア!!!!」

・・・、これもパターンだ、健悟がアリシアの家の前でくだらない事を言い、アリシアが健悟をぶん殴る、お前らさすがだわ。

「慎ちゃんおはよう！今日はどこいくの？」

「さあ」

「まあお決まりだよね」

【6月12日土曜日 時刻1:26 晴れ】

「昼どうする？」

「私ねえ、慎ちゃんの好きなものが食べたい！」

「なあなあ！俺ラーメン食いたい！！」

「うっさい！健悟黙ってる！！お前には聞いてない！！」

「じゃあ、ラーメンで」

「そうだよね！ラーメンが良いよね！！」

「おい」

まあなんだ、カウンター席でラーメン食べてるわけだが、何故隣の席に姉ちゃんがいるんだ？

「まあ、いいではないか弟よ」

この人本当謎だよ。

【6月12日土曜日 時刻5：52 晴れ】

「帰るか」

「ああ」

「そだね」

「そうだな」

………なんか今一人多かつたぞ。

「点呼を取る、1番」

「2番」

「3番」

ダブった。

「おい、姉ちゃん」

「なんだ」

「何故いる」

「知らん」

またパターンだ、俺たちで何処かに出かけるといつの間にか姉ちゃんがいる。

「A M A I」

【6月12日土曜日 時刻11:28 晴れ】

今日もあの夢見るのかな、疲れるからあまり見たいとは思わないんだけど、しかもいつも途切れ途切れで、漫画で言つと間の1巻が抜けてる感じだ。

「寝るか・・・」

【6月13日曜日 時刻3:21 雨】

『イ

『シン、早く来テ、デナイト、私ハ、飛ベナ

夢（後書き）

The 適当！いやまあ、一応考えてますけど完全にその場のノリとかで書いてます。

月と剣（前書き）

意味フです。あとセリフばかりです。あとめっちゃ好き勝手にやっています。

月と剣

【6月12日 土曜日 時刻PM7:36 晴れ】

その日、俺は慎やアリシアといつものように遊びいつものように帰ってきた、けど違う、何故か凄まじい眠気に襲われて、俺はその日すぐさまベットで眠りに付いた。

俺はあまり『夢』というのを見ないタイプだった、だがその日は違った、俺は見たんだ、『月』を。

【6月14日 月曜日 時刻AM6:24 曇り】

学校

「なあ、慎」

俺は久々に見た夢のことを慎に言おうと思った。

「なんだよ」

「久々にさ、『夢』を見たんだよ」

慎の顔を見ると少し驚いたような顔をしていた。

「健悟が夢を見るなんてめずらしいな、前は『お前ばかり夢見て

『……………!!!……………』

「うわぁ……………!!」

はぁはぁはぁ……………今の『夢』……………なんだつたんだろ……………もの
すごくリアルだったな……………。

「憤起きてるかな……………」

プルルルルルル……………プルルルルルル……………

「出ない……………」

こんな時間に憤が起きてるわけないか……………

その1カ月後、三人の死体がそれぞれの自宅から発見された。

月と剣（後書き）

どうですかね？意味フですよ、ご都合主義ってヤツですかね。

次回！ISの世界へレッツゴー……！！！！

たぶんこんなにテンション高くないし明るい話じゃないですw

IS (前書き)

長いっす、わけわかんねーっす。

目が覚めたらそこは知らない場所で、知らない人の顔が覗きこんでいた。

ここは何所のなだろうか。

「目が覚めたか」

「よかったですね」

黒髪の女性が俺に話しかけてきて、優しい顔の女性が安堵していた。

「自分の名前がわかるか？」

名前を聞かれた、ふむ、どうやら自分のことはわかる。

「櫻田慎……」
さくらだしん

「そうか、ならそっちの2人の名前も知っているか？」

2人?と思えば隣を見ると、健悟とアリシアがいた。

「……男の方が花形健悟^{はながたけん}、で、女の方が草野アリシア(くさの)

内心俺は「なんでお前らいんの?」ってなってたけど顔には出さない、もう一度いっけど顔には出さない、なので男の俺はジト目なんてしてないんだ、してないんだ。

「なんだその顔は？」

どうやら顔に出ていたようだ。

「なんでもないです・・・」

ここが何所かもわかってないのに俺は意外と平常心だった、自分が自分で謎だな。

「ふむ、名乗るのが遅くなったな、私は織斑千冬おりむらちちかふゆ、ここIS学園で教師をしている」

女性が名乗るが気になったのはそこではない、『IS学園』そう『IS』だ。

「あの、IS学園ってなんですか？」

「IS学園をしらないんですか？」

そこで話しかけてきたのは先ほどの優しそうな顔の女性だ。

「あのIS学園って・・・」

「あっ、申し送れました、私は山田真耶やまたままやです、織斑先生と同じでここで教師をしています」

そのあと山田真耶さんによってISを説明された、このISというのはどうやら俺が夢で見たものと似ているようだ、もしかして夢のようにはならないよな・・・。

「わかりましたか？」

「あ、ああ・・・はい」

「でも、変ですね、ISを知らないなんて」

「そうなんですか？」

「そうですね、さつきも言いましたけどISは今や世界で仕様されています、なので男性だからといって知らないというのは」

「そうだったのか、じゃあ俺は完全に不審者じゃないのか？」

「ISを知らぬ者がISを持つ・・・か」

不意に黒髪の女性、織斑千冬さんとか言ったか、その人がつぶやいた。

「どうしたんですか、織斑先生？」

「うむ、コレはお前たちのだな」

そう言いながら織斑千冬さんが見せてきたのは俺が高校の入学祝いに姉さんから貰った蝶のアクセサリーに健悟の銀のブレスレット、そしてアリシアの赤い指輪、みんな毎日付けていたのでよく憶えている。

「あ、それは・・・」

「どうやら間違いないようだな」

「たしかにそれはオレ達ですけど、それがどうかしたんですか？」

「先ほどこれらはISと判断された」

は？

いやいや、まてよ、それは俺達が前々から持ってたもので、それがISなわけがないじゃねえか、そんな馬鹿げた話聞いたことが無い。ここが別の世界なのはわかった、もちろんそれにも驚きはしたがそもそも前の世界から持っていた物がISにかわるなんてのは話が別だろ。

「信じられないようだ、これは真実だ」

「は、はぁ・・・」

全くもって信じられんがこれが現実らしい。

姉さんに貰ったものがISになっちまった。

「それでは昨日入学式をしたばかりですけど、今日は3人の転校生を紹介しようかしします」

俺たちは今IS学園の1年1組の教室の前で待たされていた、何故かって？それはな・・・

「それでは3人共入ってきてくださいーい！」

そっとうわけだ。

そして教室に入る俺達3人。

「では自己紹介してください」

「櫻田慎です、二人目のIS操縦者ですが何分ISのことには疎いのでその辺は大目に見てください、それでは本日よりよろしくお願ひします」

歓声、と、いうより騒音、が上がる、平常心平常心、笑顔笑顔、うん、無理。

続いて健悟が自己紹介をする。

「花形健悟です！！俺もISについてはよくわかんねえからみんなが教えてくれると嬉しいかな！」

と超キメ顔で言う、こいつは何所に行ってもかわらないようだ。

もちろん健悟のときにも歓声（騒音）は上がる、それを聞いて健悟は「俺ここだといけんじゃね？」など囁いてくるが無視する。

そして最後にアリシア。

「えっと、私は草野アリシアって言います、えっと、実は最近になってISの事を知りました、なので私にも色々教えてくれると嬉しいかな」

歓声（騒音）はなく女子達の「かわいい」と言うのがよく聞こえた、そして、最前列の真ん中の生徒（男）が「おおー・・・」と言っていたのはたしかだった。

「ではあなた達3人の席はあそこです」

と、山田真耶さん（今は山田先生か）が俺達の席を指さす、そこは窓際はから横に3席、しかも最後の列だ。

俺達が席に座ると、織斑千冬さん（彼女も今は織斑先生だな）が話始める。

「それでは再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める」

なんだそれ？まあ俺達は関係なさそうだからいつか。

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあ、クラス長だな。因みにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいろ」

「はい！私は織斑くんを推薦します！」

「え、俺!？」

と言いながら先ほどの少年(俺が言うのもあんだが)が立ち上がり驚いている、すると。

「座れ織斑、邪魔だ」

今気が付いたが彼も織斑というらしい、織斑先生に聞かされていた弟というのはあいつのことらしい、何故気が付かなかった俺……。

「私は櫻田くんがいいと思います!!!」

「な!?!俺もか!」

俺までもか!ならば!!!

「俺は花形くんがいいと思います!!!」

「おいてめえ慎ふざけんな!!!」

「残念だったなてめえも道ずれだ」

フッフッフ、俺だけなんてもってのほかだぜ、お前のも苦しんでもらうぜ健悟。(大げさ)

「なら俺は草野さんがいいと重いまーす!!!」

「てめえ健悟!!!!!!!」

そう言いながら健悟の胸倉をつかむアリシア、それを見たクラスメイト達と教師陣は啞然とした顔をしていた。

「ボソツ（アリシア、アリシア）」

「はっ！」

そのあと健悟の胸倉離し顔を赤くして席に静かに座る、健悟相手だとアリシアは性格かわるからなあ。

「他にいないのか？いないならこのまま投票で決めるぞ」

「納得いきませんわ！！」

すると金髪のいかにもお嬢様って感じの女の子が大声を上げる。

「そのような選出認められません！大体実力から行けばこのわたくしが代表に選出されるのは必然ですが、物珍しいという理由で運だけの男が選ばれるなど論外ですわ！そんな屈辱の一年間をわたくしに味わえとおっしゃるんですか」

これ完全に俺達のことじゃねえか、まあ確かによくも知らないやつらをクラス代表なんかにしたくはないよなあ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

織斑くん君も言うつねえ、君達もつと穩便に行こうよ、おじちゃんも
う申し訳なさすぎて泣けてきたよ。

「いいぞ織斑弟ー！もつと言ってやれー！！」

ガシツ！！

そこで俺は健悟のこめかみを掴みアイアンクローをする、黙ってる
健悟。

「あ、貴方、わたくしの祖国を侮辱するのですか！！これだから日
本って言うのは！！！」

その後も織斑先生の弟と金髪お嬢様の口論は続き。

「け・・・」

「け？」

「決闘ですわー！！」

「ああ、いいぜ、やってやるよ」

「そちらの方々もですわよー！！」

「俺達もですか・・・」

何故か俺達までもがその決闘とやら参加させられる様だ。

こつこつ子苦手なんだよなあ・・・。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い
いいえ、奴隷にしますわよ」

「ああ、いいぜ。小間使いでも奴隷でも何にでもなってるよ！」

折角だから適当に負けようかと考えていたら案の定だった、わざと
負けると奴隷にされるらしい、この子の頭の中はどうなってるのか
知りたい、そして織斑先生の弟よ、君大丈夫なのか・・・？

「なあなあ、慎」

そんなことを考えていると健悟のやつが小声で話しかけてきた。

「俺なんか目覚めそうなんだけど、どうしよう・・・！」

もうこいつの事は知らん。

「あなた達もいいですわね!!」

「ああ、もうなんでもいいよ・・・」

「俺はいいぜ！大賛成だ!!」

「え、私も？」

「さて、話はまとまったようだな。それでは勝負は次の月曜日。放
課後、第三アリーナで行う。織斑・オルコット・櫻田・花形・草野
はそれぞれ用意をしておくように。それでは授業を始める」

次の月曜日ね、対戦方式はどつなるんだろつか、まあ当日になればわかる話しだな。

「あれ？私はなんで無視されてるの？あれあれ？」

IS (後書き)

うおおおおおー!!..うん!!..!

なんかアレッすよね。() . . . ()

まあでも読んで下さってありがとうございます!!
次回もお楽しみに!!..() . . . ()

クラス代表戦(前書き)

イエイエイエイエイエイエイエイエイエイエ!!!!!!!!!!
。)
。 ()
)

クラス代表戦

くクラス代表戦 当日く

クラス代表戦当日、俺達は今第三アリーナのピットで一夏のISSを見ています。

何故一夏と呼んでいるかと言うと、まあ部屋がお隣さんだったりするわけだ、毎日夫婦喧嘩が絶えないお隣さんだからな。

「体を動かせ。すぐに装着しろ。時間がないからフォーマットとフイッティングは実戦でやれ。できなければ負けるだけだ。わかったな」

それにしてもこれがISSかすごいな、俺達のいた世界じゃこんなのは夢のまた夢だったな。

「背中を預けるように、ああそうだ。座る感じでいい。あとはシステムが最適化をする」

そのあと一夏が金髪お嬢様、まあセシリア・オルコットというらしいが、そのセシリアの使う『ブルー・ティアーズ』に結果からいうと負けた。

しかしあれは惜しかった、あと一步と言うところで一夏のISS『白式』がエネルギー切れを起こした。

そして、次の対戦カードは……。

櫻田慎VS花形健悟

「俺達だな！慎！！」

そう言いながら健悟が肩に腕を回してくる。

「一応頑張るよ」

「頑張つてね慎！！」

アリシアがそういうのが俺はあまり乗り気ではなかったりする、何故だろうか、それは俺にもわからない。

「でもISってどうやって出すんだ？」

俺がそう言っていると健悟のやつが。

「甘いぜ慎！俺は先に行くからな！！」

「健悟のやつスゲーなISを始めて触ったようには思えないぜ」

「ああ、たしかに」

そう言いながら一夏ともう一人、篠ノ之箒しののほが近寄ってくる。

「これ本当にどうやって出すんだ？」

「イメージするんだ、自分に装甲が付くイメージを」

そう篠ノ之さんが教えてくれるがイメージって言っても難しいな。

「こっつ、か・・・？」

すると俺の姉さんに貰ったアクセサリーが光を放し、俺の四肢にISが展開される。

「意外とスラッとしてるんだな、お前のISは」

「なんだか俺の白式に似てないか？」

「慎かつこいいい！」

ISを展開できた、視界が先ほどよりも良好、これがISか・・・。

『展開できたのなら早く出る、花形が今にも暴れだしそうだ』

織斑先生からのピット内へ放送が入る、健悟も我慢弱いな。

「それじゃあ行ってくる」

「勝てよー！」

「俺の分も頑張ってくれ！」

「健悟なんてぶっ殺しちゃえ慎！ー！」

「ああ、それなりに頑張ってくる」

そして健悟の下へと行く。

「よう、待ちくたびれたぜ」

「悪いな」

そこでアリーナに放送が掛かる。

『それでは花形健悟【X】^{エックス}VS櫻田慎】（ターンエー）【の試合を始めます』

『両者規定の位置へ移動してください』

『それでは始め!!--!』

合図とともに健悟のやつがビームライフルをぶっ放してくる、俺はそれを右、左を避ける、避けながら俺はいま俺に使える武装を探す。

「今使える武装は・・・」

『ハンマー』

『ビームサーベル』

「これだけかよ!!--!」

俺はハンマー取り出し健悟に向かって投げる。

「なんだよそのヘンテコなのは！打ち落としてやんよ！！」

「言ってる！！」

ハンマーにはブースターが付いていて速度が加速しさらに回転が加えられるようになってきているようだ、それを健悟がビームライフルで打ち落とそうとするがハンマーの速度は衰えない、驚いている健悟にそのまま当たるかと思いきや健悟はシールドでそれを防いだ。

「あぶねえじゃねえか！」

「ぞまゝみる！」

すると健悟がビームサーベルを抜く。

「だったら接近戦だ！！」

「望むところだ！！」

俺の方も肩に付いているビームサーベルを取り出す。

ビームサーベル同士が擦れあう、俺達は負けじと切りあい、そして健悟が離れていく。

「このままじゃ埒が明かねえ」

「で、どうするんだよ」

「こっつするんだよ！！」

いまは迷ってる場合じゃない!!

「シールド展開!! I・フィールド全開!! 行っけえええええええええええええええ!!」

健悟の巨大な砲撃をシールドとI・フィールドで防ぐ間シールドエネルギーがものすごい勢いで減っていく、完全に防いでいるが砲撃が強すぎてI・フィールドのパワーがどうやら間に合っていないようだった。

シールドとI・フィールドではじかれたビームがアリーナの土を削り、壁に傷を付ける。

その後のことは覚えていない、気が付けば医務室のベットの上だった。

目が覚めて隣を見ると俺は驚愕した、何故ならボロボロになって眠っているんじゃないかって完全に気絶している状態で健悟がベットのの上にいたからだった。

「慎、目が覚めた？」

健悟と反対の方向から声が聞こえた、そちらを向くとアリシアがいた、どうやらずっと俺達の事を見てくれていたようだ。

「そついやあの後どうなったんだ？」

「引き分け、織斑先生超怒ってたよ、健悟なんてフルボッコにされてたもん」

「健悟にはそのくらいが丁度いいだろ」

「フフツ、そうだね」

「アイシアの試合はどうなったんだ？」

「私はまた明日だって、相手はもちろんセシリアさんだけど」

「そっか」

「それじゃあ明日も早いから私戻るね」

「ああ、明日、まあ勝てとは言わない、でも頑張れ」

「そこは勝って言って欲しかったなあ」

「向こうは代表候補生だろ」

「それでも!」

「じゃあ、勝てよ!アリシア!」

「うん!」

俺達は拳を合わせる、そしてアリシアは寮の部屋へと戻って行った。

クラス代表戦（後書き）

前書きさ、で？って感じじゃね？

今回も読んでいただきありがとうございます！
次回もね！よろしくね！！く。°。°。（）ノ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9866y/>

IS -

2011年12月26日00時54分発行